

WHO studies Tamiflu resistance after new report Reuters AlertNet, UK (英国) W
HO、タミフル耐性株の調査に 2008/1/30

WHOは29日、ヨーロッパの一定地域で広く使われているタミフルが、季節性インフルエンザウイルスに耐性を示したという研究結果を受けて、季節性インフルエンザウイルスのタミフルに対する耐性程度を調査すると発表した。

ヨーロッパ疾病管理センター（ECDC）の発行した28日の予備的調査結果によると、昨年11月と12月に、ヨーロッパ10カ国から集めた148検体のインフルエンザウイルス株のうち19株がロッシュ社製造のタミフルに耐性を示したという。

WHOは29日、タミフルのインフルエンザに対する効果が低下しているのか否かの評価を、世界リスクアセスメントとして開始し、各国のインフルエンザ研究機関や施設と連絡をとり、インフルエンザウイルスの耐性率等に関し情報を収集している。

WHOのフレドリック・ハイデン氏は、通常のインフルエンザにも広くタミフルを処方している日本も含めて、多くの国の関係当局では、タミフルに対する異常と思えるインフルエンザウイルスの耐性株は経験ないと報告している、と語った。

「今回発表の初期段階の報告を読む限り、今回の問題は世界的問題ではないが、世界的関心問題ではある」、とハイデン氏はロイターに語った。

現在調査中ではあるが、現在はこれまでのタミフル使用に関するWHOの勧奨、すなわち通常の季節性インフルと鳥インフルの治療に最初に選択すべき薬剤であるとする見解、に関しては変更はない、状況の監視を続ける、と同氏は語っている。

ECDCの調査では、ノルウエーで分離された16検体のうち、12検体がタミフルに耐性を示したとされる。

他にインフルエンザ治療薬としてリレンザ（GSK社）とアマンタジンおよびリマンタジンがあるが、WHOは後2剤は高度にウイルスが耐性になっているとして、推奨していない。

WHOの報道官であるグレゴリー・ハートレ氏は、今回の研究での高度の耐性率は驚きだとコメントしている。今回対象となったウイルスは、今冬ヨーロッパで流行しているH1N1株である。

全体として今回のストックホルムに基盤を置くECDCの研究結果は、13%のウイルス検体がタミフル耐性株となっており、これまで報告されてきた0～2%の季節性インフルエンザが耐性となっているとする研究結果と比較すると、大きな差が出ている。

ロッシュ社は28日、タミフルがいかなる致死性鳥インフルエンザウイルスに対しても有効であるという事実に疑いはない、とコメントを発表した。

ハイデン氏は、タミフルを投与されなかった鳥インフル発病者の90%近くは死亡し、投与された発病者の50%は生存しているとコメントしている。

「これは非常に意味のある生存率の改善ではあるが、まだ十分とは言えない」、と同氏は付け加える。

米国の専門家によると、生存率の多様性は、患者の治療開始の遅れも原因とされる。